

平成 29 年度 大学職員情報化研究講習会 ～基礎講習コース～ 研修報告 E-3【走りながら目薬】班

1. テーマ

「これからの社会を担っていく人材育成 ～ キャンパスライフ with S (staff・student) ～」

2. テーマ選定理由

昨今、文科省からの提言にもあるとおり、大学を取り巻く環境はめまぐるしく変化し、大学教育の質的転換の必要性和教学マネジメント体制の改革などが重要視されている。また社会情勢の風に煽られ、求められている人材も、急速に変化している状況となっている。

そのような時代背景において、我々、高等教育機関が果たすべき役割は何なのか？そして役割を果たすために何をすべきか？を今一度再認識し、社会が求める人材像を輩出するための施策を考えなければならない。そして施策を達成する為には、我々、事務職員だけでは不可能である。教員および保護者との協働が必要不可欠であるため、学生、教育系職員、事務職員、保護者が持つ意識ベクトルを合わせ、関連する全ての人が協力し合い実践していく必要があると考え with (一緒に) を付したテーマとした。

なお、テーマ選定をするにあたり、大学の役割、現状を再認識し、そこから課題を浮き彫りにすることで根底となる課題をあぶり出し、課題解決方法について、討議を行った。

3. 課題発掘までの経緯

まず、大学の役割を再認識するため、各大学の役割についてブレインストーミングにて情報の収集を図った。収集した情報には、高等教育機関は専門知識の習得、社会人基礎力の習得などの意見が多かったが、専門知識は学科等により違うため、社会人基礎力の習得について、着目することにし、この点について討議することとなった。

次に、現代社会が何を求めているか？について、社会情勢を鑑みた視点から考える必要があることから、近年の社会環境について討議した結果、現代社会では、AI機能の進化、IT革命など、めまぐるしく変化しており、今後も急速に進化するよう予測されている。このことから世の中で求められる人材としては、今後も様々な社会環境の変化に臨機応変に対応できる人材が必要ではないか？と考えた。

そして、このような人材となるために必要な能力は、聞く力・調整力等のコミュニケーション能力、課題探求能力、課題解決能力、また主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する力が必要であると導き出し、このような能力をもった人材像を育成することが大学の役割であると考え、それぞれの大学の現状および理想のギャップ、そして浮き彫りになった課題を導きだし、課題に対する解決策(案)を出すこととした。

4. 課題→解決策

大学の理想と現状の差異から更に課題を深堀し、何故このような課題が発生しているのか?について討議し2点が主な課題となり、解決策と合わせ以下のとおりとなった。

- ① 従来どおりの受動的な講義ではなく、学生が自らの意見を発信し、討議し課題として取り上げ、解決策等をディスカッションする場（講義方法の工夫、場所の確保など）が少ない。また、全教職員の意識統一ができていないため、育成する人材がミスマッチしている。そしてアクティブラーニングなどの能動的講義を導入にすることに消極的である。

→ SD・FDの壁を取り壊す。全教職員での研修を実施し、意識改革を図る。また、卒業生を講師に招き、成功談を報告するなど、導入することに関するメリットをしっかりと伝えていく。

- ② イベント告知など広報活動が弱く、課外活動イベントの魅力が学生に伝わっていない。

→ 課外活動の実体験を学生に話してもらい、経験の大切さや魅力を伝える機会を設け、学生に正課外の活動を知ってもらい、情報伝達を増やす。

また、情報発信ツールとして、学生にとってなじみのあるSNSの活用し、視覚、聴覚あらゆる方向から周知を行う。

5. まとめ

この度の研修では、他大学の現状および教育改革、業務改善等の進捗状況について意見を聞くことができ、本学が今どのようなレベルであるのか?そして、本学にとって何が重要視する課題なのか?今後何をしていくべきなのか?という気づきが得られた。

また、思うだけでなく、行動すること、さらに多角的視点から見ることで、今まで気づかなかったことを発見し、グループでの協働作業および課題の本質を追求する方法、課題発見能力、解決能力の向上にも繋がる研修となり、交流のみならず、多くの知識を得る場となった。

業務遂行にあたり常に改善を意識する姿勢の大切さなど、実際に自らで話し合い体験することで、より実感できた研修であった。

ここで得た知識は自分の財産として取り入れるだけでなく、大学全体へのフィードバックすることで情報共有を図り、教育改革、業務改善等に向けた第一歩としたい。

また、一度の改善に満足するのではなく、より利便性の向上を図る改善や業務効率の向上を図るようPDC Aサイクルにて、追及を怠わず常に最善の方法を意識しながら業務に向かいたい。

以上